

聖霊シリーズ 第一弾 「聖霊の位格(人格)」

「もうひとりの助け主」の約束 ヨハネ 14:16-17

1A 位格(人格)の意義

2A 聖霊の位格

1B 知情意

2B 人格の伴った行為

3B 人格のある者が受ける行為

3A イエスに代わる助け主

1B 孤児にしないイエス様

2B 意味のある関係

1C いろいろな体験

2C 聖霊の支配

3C 聖霊への服従

本文

今日から、私たちは「聖霊」についての学びをしていきます。まず、聖書箇所をお読みします。

「もうひとりの助け主」の約束 ヨハネ 14:16-17

16 わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。17 その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。

イエス様は、十字架につけられる前、最後の晩餐を弟子たちと取られて、その時間を彼らと過ごしておられました。主が彼らと共におられる時間がもう少ないのを知って、ご自分の愛を余すところなく示されました。弟子たちに対する愛は、彼らの足を洗うところから始まりました。主人が仕えているのから、あなたがたも仕え合いなさいという命令から始まり、そして互いに愛し合いなさい、そしていなくなっても、わたしを信じなさい、わたしがあなたがたのために天に住まいを用意してから戻ってくるから、そしてわたしの名によって祈るなら、その祈りを父なる神がそのまま聞いてくださる、と語られました。

そうして、いま読みました父なる神から、イエス様のお願いによって与えられる、「もうひとりの助け主」の約束を下されたのです。イエス様が地上にはおられなくなるけれども、もうひとりの助け主

が共におられる。またあなたがたの内におられる、と約束してくださいました。そして、この方は真理の御霊です。イエスが語られた神の真理を思い起こし、真理へと導いてくださり、イエスの栄光を現してくださる方です。

1A 位格(人格)の意義

私たちはこれから、聖霊との深い、豊かな関わりの中に入っていけるよう祈りを持って、学んでいきたいと思っています。聖霊は、三位一体の神の第三位格です。父なる神、子なるキリスト、そして聖霊なる神です。聖霊が、三つの位格の中で、私たちに最も近い存在であります。私たちが神と交わる時に、聖霊によって私たちの霊に触れてくださり、それでキリストにある神との関係を結んでいます。ですから、ご聖霊を知ることは、私たちキリスト者に豊かな、深い神との関わりを保証してくれるのです。

ですから、これまでの聖書の学びとは主旨が異なります。実は、これまでの聖書の学びにおいてもあるべき姿なのですが、私たちは兎角、聖書の学び自体が自己目的化して、その本文を体系的に知ることを目標としています。けれども、本来の目的はキリストご自身に人格的に会うことです。聖霊の働きによって、この方を知り、この方にひれ伏し、この方に従い、聖霊によってこの方に似た者に変えられることが目的です。けれども、ご聖霊を知ることはそのまま、この方から語りかけられ、この方から学び、そのまま信者の歩みに生きた神が関わることとなります。この学びを、忍耐をもって行いましょう。そしてご聖霊に自分を従わせることによって、この方の愛と力、その賜物が与えられることを祈ります。

したがって、最初の学びは聖霊が人格を持っておられる、ということに集中します。私たちはとにかく、ご聖霊が単なる力、エネルギーのように捉える傾向があります。「今、聖霊が来た！」などと言う時に、エネルギーと言い換えてもよい発言になっているかもしれません。事実、キリスト教の異端は、聖霊をそのように教えています。しかし違います。聖霊は人格をお持ちなのです。英語ですと、聖霊はパーソン(Person)だと言えます。パーソンはそのまま訳すと「人」になってしまいますが、そうではなく人格を持つ存在という意味です。神学用語では「位格(ラテン語で「ペルソナ」)」と言います。人格を持っておられるからこそ、私たちはこの方と関わりを持つことができるのです。単なる力やエネルギー、エッセンスとは関わりを持つことはできません。

2A 聖霊の位格

1B 知情意

ご聖霊が人格を持っておられることは、先ほど読んだヨハネ 14 章 16-17 節からも分かります。人称代名詞「この方」あるいは「その方」が聖霊に使われています。英語ですと“He”、つまり「彼」となっています。もしエネルギーであれば、「それは」という代名詞が使われますが、そうではありません。

そして人格というのは、「知情意」があれば人格があると認めることができます。知性と感情、そして意志のあるところに人格があります。聖霊に知性があるのか、見てみましょう。「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。(1コリント 2:10)」御霊は、全てのことを探っておられる、神の深みにまで知っておられます。明らかに知性を持っておられます。そして、少し進んで 13 節を読みますと、「この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。」とあります。御霊が私たちに教えてください。人の知恵では悟ることのできないことを、教えてください。ですから、私たちが知性において人に知ることのできないことを、深く悟ることができた時は、聖霊が教え、導いてくださったからであります。

そして次に、「意志」について見てみましょう。「しかし、同一の御霊がこれらすべてのことをなされるのであって、みこころのままに、おのおのにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。(1コリント 12:11)」御心のままに、というのが意志であります。日本語訳は「心」と訳していますが、実際は意志であります。ご自分で考え決められたことにしたがって、賜物を各々に与えておられる、ということです。御霊は私たちの思いに付いていくような、ふわふわしたものではなく、むしろ、ご自身でお決めになる意志を持っておられます。

そして、「感情」について見ましょう。「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。(ローマ 15:30)」御霊の愛、とあります。御霊は愛を持っておられます。その愛によって、パウロのために力を尽くして祈ってくださいとお願いしています。御霊が無機質な働きではなく、愛によって導いてくださり、交わってくださるのです。

ところで、聖霊がなぜしばしば、エネルギーや単なる力、本質などのように見られてしまうのか、その誤解の元は、聖霊はご自身を主張させないことがあります。「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。(ヨハネ 15:26)」御霊はイエスを証しされます。そしてイエスが父なる神を完全に現しておられます。ですから御霊が働かれる時、イエスの御名が明らかにされます。このように御霊はご自身を主張されないの、かえってイエスを証しされるので、私たちは聖霊が活力を与えるエキスのように捉えてしまうのです。しかし違いますね。

2B 人格の伴った行為

そして次に、人格がなければできない行為を聖霊が行われているところを見ます。初めに、使徒 13 章 2 節を見ます。「彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われた。(使徒 13:2)」だれが言われていますか？聖霊ご自身が語られています。聖霊が私たちに個人的に語ってくださるのです。

御霊が語られるその他の箇所を挙げますと、「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。(1テモテ 4:1)」御霊が明らかに言われています。また、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。(黙示 2:7)」という言葉があります。教会に御霊が語られるのです。

そして人格がなければできない行為としては、執り成しです。御霊が執り成しをされます。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。(ローマ 8:26)」キリストも右の座で執り成しをされていますが、御霊も執り成して下さっています。

そして先ほど、御霊がイエスの証しをされるところを読みましたが、証しをする、証言をすることも人格がなければできないことです。

そして、聖霊は教えられます。「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。(ヨハネ 14:26)」そして、悟りを与えてくださいます。「あなたは、彼らに悟らせようと、あなたのいつくしみ深い霊を賜わり、彼らの口からあなたのマナを絶やさず、彼らが渴いたときには、彼らに水を与えられました。(ネヘミヤ 9:20)」

そして聖霊は導かれます。「それから彼らは、アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。こうしてムシヤに面した所に来たとき、ビテニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。(使徒 16:6-7)」パウロは、小アジアで続けて宣教の働きをしようとしていたのに、明確にそれを禁じられました。そして、ヨーロッパへの宣教に導かれたのです。

御霊は交わりをしてくださいます。「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。(2コリント 13:13)」聖霊との交わりがありますように、と祈っています。ちなみにここは、三位一体の神が現れていますね。

他にもたくさんの働きをされますが、他には奇跡を行われます。「また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。(ローマ 15:19)」聖霊が働かれるというと、奇跡を行なうことと一つにしてしまいがちですが、これまで見てきたように、私たちの主との歩みの中で、これだけの人格的な関わりを持ってくださる方なのです。

3B 人格のある者が受ける行為

ここまで、聖霊が人格ある存在として動かれる聖書箇所を眺めましたが、次に聖霊が人格ある方として受ける行為について見ていきたいと思います。

聖霊は悲しまれます。私たちの行なうことによって悲しみを受けることがあります。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。(エペソ 4:30)」私たちは学びました、苦み、憤り、叫び、これらのものをいっさいの悪意とともに捨て去りなさいとあります。

聖霊に嘘を付くことができます。「そこで、ペテロがこう言った。「アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自分のために残しておいたのか。(使徒 5:3)」アナニヤとサツピラが、財産の一部を持ったままでこれが財産の全てだと偽った時に、聖霊に対して偽っていた、ということです。私たちはエネルギーに対して偽ることはできません、人格があるからこそ嘘を付くことができます。

聖霊に対して逆らうことができます。ステパノが、聞いているユダヤ人たちに対して言いました。「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、先祖たちと同様に、いつも聖霊に逆らっているのです。(使徒 7:51)」そして聖霊に逆らい、この方を痛ませることができます。「しかし、彼らは逆らい、主の聖なる御霊を痛ませたので、主は彼らの敵となり、みずから彼らと戦われた。(イザヤ 63:10)」そして逆らい、痛めるだけでなく、汚す、あるいは冒瀆を言うことができます。「だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけます。しかし、聖霊に逆らう冒瀆は赦されません。(マタイ 12:31)」

そしてご聖霊は、他の位格、父なる神とキリストと並べて述べられています。つまり、父なる神とキリストと同じように人格ある方としてみなされています。「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け…(マタイ 28:19)」ちなみに、ここの「御名」は単数形です。すなわち、父なる神、子なるキリスト、聖霊が一つの名を持っているということです。三位一体の神であります。そして先ほど読みましたが、パウロの祝祷には、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。」とあります。

さらに、信者と一体になっておられる聖霊の姿もあります。信者がもちろん人格を持っているように聖霊も持つておられます。「聖霊と私たちは、次のせひ必要な事のほかは、あなたがたにその上、どんな重荷も負わせないことを決めました。(使徒 15:28)」聖霊が、エルサレム会議にて、異邦人がモーセの律法を守らなくてよいという決議と一体になっておられます。主イエスの来られることを待つときも同じです。「御霊も花嫁も言う。『来てください。』これを聞く者は、『来てください。』と言いなさい。(黙示 22:17)」

3A イエスに代わる助け主

いかがでしょうか、いかに聖霊が私たちに人格をもって、個人として関わってくださるかを認めることができたのではないのでしょうか？人格のある方ですから、この方を人格的に知ることができます。人格のある方ですから、近しい親密な交わりをすることができます。

1B 孤児にしないイエス様

ヨハネ 14 章 16 節をもう一度見てみましょう。イエス様が御父にお願い、遣わす存在は「もうひとりの助け主」であります。助け主というのは、「パラクレトス」というギリシヤ語です。パラは「そばに」という意味で、「クレトス」には「呼ばれる、召される」という意味があります。つまり、新改訳の下の欄に説明がありますが、「援助のためにそばに呼ばれた者」という意味です。私たちのそばにいて、助けてくださる方です。

ある牧師さんが、日本人の信仰の持ち方と、キリスト教信仰との大きな違いについて話していました。日本人は、自分で努力してある人は聖書を学んだり、またある人は教会の活動に関わったり、そのようなことをすることで自分が神に近づくことができると考えます。自分が一定の水準に達しているかどうかを物差しにしてしまうのです。しかし、キリスト教は違うと言いました。「イエスが共におられる」ということが精髓です。この方と生きること、この方と交わること、そして永遠に過ごすことがその本質であります。ですから、パラクレトスという働きを聖霊が担っておられます。

そして、「もうひとり」という言葉が興味深いです。ギリシヤ語は世界で最も数学的な言語だと言われています。正確に一つの概念を伝えることのできる上で断トツの言語だと言うことです。ですから、日本語はもちろんのこと、英語でさえ曖昧にされている表現も区別できます。この「もうひとり」あるいは「もう一つ」と訳せる言葉は、アロスです。これは、「同じ種類あるいは同質の、もう一つ」という意味です。ギリシヤ語にはヘテロスという言葉もあります。英語でも heterosexual という言葉がありますが「異性の」という意味です。これは、「質の違う、もう一つ」と言います。

例えば、「もう一つの交通手段で教会に来ました」ということを言ったとします。いつもは東京メトロの千代田線を使って西日暮里駅に降りますが、今日だけは JR 山手線を使って降りました。皆さんがギリシヤ人であれば、アロス、同質のもう一つの言葉を使います。けれども、そうではなくて自家用車に乗って、近くの駐車場に停めて来たという意味で話す時は、ヘテロスの交通手段で教会に来た、と話すのです。電車ではなく自動車です。けれどもアロスの場合は、同じ電車であり、同質です。つまりイエス様は、ご自分と同質である助け主を遣わすと言われているのです。聖霊がイエス様に代わる助け主なのだけでなく、イエス様と同質であり、同質の援助をそばにいて行なってくださるということでもあります。

弟子たちは、イエス様を知識として信頼していたのではありません。実感として、共に時間を過ごす方として、深い信頼を寄せていました。弟子たちはイエス様と一緒にいれば、何かと助かってい

ました。思い煩うことはなかったのです。イエス様が、どのようなところにもおられることを知っていました。パリサイ人たちが、弟子たちに詰問を浴びせました。例えば、麦畑で安息日に麦の穂を摘んで、手でもみ出して食べていました。それはパリサイ人たちには安息日違反です。何も良く分からない人が、専門家から詰問されたのです。けれども、イエス様はダビデの例を出して、ひもじい時に本来食べてはならないパンを食べたではないか、そしてイエスが安息日の主であることを話されました。弟子たちのしていることを、守られたのです。

とても具体的な生活の一コマでも、イエス様は助けられました。カペナウムのペテロの家に、徴税人が来ました。エルサレムの神殿に納める税金を取り立てに来たのです。あら困った、お金がありません。でもペテロは、「納めます！」と言ってしまいました。そして、イエス様のところに行きました。イエス様は、「国の王の子どもたちは、税金を納める必要はありません。あなたがたは、王キリストの子供なのです。けれども、つまずかせると行けないから納めなさい。」と言われました。それでペテロが釣りをするように言いつけられました。それで釣った魚の口に、一シケル(シケル)相当の硬貨を加えているのです。イエス様とペテロの分をそれで払いました。

イエス様無しには、弟子たちは生きることはできません。それで、最後の晩餐の時にイエス様が、「わたしが行く所では、あなたがたは来ることができない。」と言われた言葉に、大きな動揺と不安を覚えたのです。それでイエス様は、ヨハネ 14 章 18 節でこう言われました。「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にしません。」孤児にしないよ、と慰められました。その慰めは、もうひとりの助け主を遣わすことによって成就されます。イエスを肉眼で見ることはなくなりますが、聖霊によってイエスが共におられることとなるのです。聖霊は、このようにあらゆる状況の中で共におられて、あらゆる方面から助けを与えてくださる方であります。

2B 意味のある関係

ですから、聖霊との意味ある関係を探ることは非常に大切なのです。弟子たちが地上でイエス様と共にいたように、今、聖霊はキリストの弟子たちに共にいてくださいます。私たちの内に、聖霊を求める渴望を与えてくださいますように。

1C いろいろな体験

これまで主に用いられた、大きな働きに用いられた器は、何らかの形で聖霊に満たされる体験をしています。アメリカという国は、何度か大覚醒と呼ばれる、霊的覚醒が起こりました。そこで、不ドワイド・ムーディーであるとか、フィニーであるとか、そして今も生きているビリー・グラハムも、それぞれが聖霊体験をしています。フィニーは自分の体験を、「液化した愛の波が繰り返し、繰り返し押し寄せてきて、それは、「この波がずっと自分に押し寄せるなら、私は死んでしまう。」と叫ぶまで続いたと述べています。

しかし、私たちはそのような体験を求めることはできません。神がそれぞれの人に、それぞれの

方法で聖霊との交わりを体験させていただきます。ある人は電撃的な体験かもしれませんが、ある人にとっては無限の平安と愛が静かに自分の魂を満たすのかもしれませんが。それぞれの経験は素晴らしいものです。しかし、聖霊の働きを感覚の中で見出そうとすることは危険です。もしかしたら全く感じないのかもしれませんが。けれどもそれは、聖霊との関係を否定するものではないのです。

2C 聖霊の支配

そしてもう一つ、目的は聖霊をもっと受けることではありません。今ある自分に聖霊がもっと臨まれることではありません。そうではなく、今の自分がご聖霊にもっと捕えられることです。自分の生活が御霊によって支配を受け、御霊に導かれ、御霊に歩み、御霊に満たされるのです。

3C 聖霊への服従

聖霊は、人格のある方として私たちと共におられます。この方に自分自身を任せ、自分を従わせます。聖霊に自分を明け渡すことによって、神が望まれているように自分が動かされていきます。そして、神の御心を行っているのだという充足を得ることができるのです。

そして大事なのは、聖霊の働きはアメリカだけではないということです。聖霊の働きは中国や他の国々だけではないということです。私たちにおられるということ、同じ聖霊が私たちに注ぎかけられるという約束であります。今、私たちは聖霊のバプテスマをこれまで以上に必要としています。新しい御霊の流れを必要としています。人間的な話しではない、人間的な集まりではない、ただ御霊に聞き、御霊に導かれ、御霊に服する集まりを必要としています。